

A Study on the Field Placement Record in Psychiatric Social Work Training : Consideration from Group-Interview of Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩本, 操 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/911

精神保健福祉援助実習における「記録」に関する研究

—実習生へのグループ・インタビュー調査からの考察—

A Study on the Field Placement Record in Psychiatric Social Work Training: Consideration from Group-Interview of Students

岩本 操
IWAMOTO, Misao

I はじめに

ソーシャルワーク専門職の国家資格である「精神保健福祉士」取得における養成課程では、精神保健福祉援助実習（270時間）が必修科目として位置づけられおり、同科目では精神保健福祉士法に基づく指定機関で180時間以上の配属実習を行うことになっている。精神保健福祉領域に限らずソーシャルワーク実習において実習記録は重要な要素であり、記録の過程を通して学生は、実践技能を発達させ、クライアントや自分自身の理解の上達を促し、実践上不可欠な記録の概念や技能を学ぶ¹。岩間は実習記録の主な目的として①記録技術の向上、②自己覚知、③スーパービジョン、④理論と実践のリンク、の4点をあげ、特に我が国のように短期集中型で実習生が援助者として直接ケースを担当することが稀な実習形態では、より実習記録が専門職の養成において重要な位置を占めることを示している²。

このように実習を効果的に行うために記録の果たす役割は大きいですが、実習記録を「どのように書き、どのように活用することで、実習生がソーシャルワーク実践の知識や技術を身につけていくのか」という指導内容及び教育方法に関する基準は明確ではない。例えば、通知「精神保健福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について」³では、「精神保健福祉援助実習」の中に記録に関する記載はなく、「精神保健福祉援助技術総論」で「記録の意義と方法」そして「精神保健福祉援助演習」で「記録実技指導」と記載されているだけである⁴。同じく社会福祉士養成授業科目に関する通知⁵では「『実習記録ノート』については、単なる記録とならない様にあらかじめ学生に指導するとともに、その内容については、個別指導に十分生かすようにすること」と記録の指導について記載されているが、「単なる記録とならない」とは何を指すのか不明である。またソーシャルワーク実習に関するテキスト等では、記録の目的と意義、実習記録ノートの構成、実習日誌の内容及び書式に関する一定の記述があるものの、具体的な指導方法については実習担当教員の裁量に任されているのが実情である。

以上のように我が国におけるソーシャルワーク実習記録のあり方については多くの課題を有し

しており、こうした現状を背景に近年、実習記録に関する実証的研究が試みられている。主な先行研究として、実習記録に関する文献考察⁶、記録の指導方法に関する実践研究^{7,8}、日誌の記述から実習内容を集計・分析した研究⁹、日誌の記述データから学生の学びの構造を明らかにした研究¹⁰があげられるが、研究の歴史も浅く今後更に継続発展していくことが求められる¹¹。そこで、本論では「実習生にとって日々の実習体験を“書く”ということが如何なる経験であるのか」という点に着目し、精神保健福祉援助実習の実習生が記録を書くプロセスで「何を感じ、何を考えたのか」聞き取りを通して明らかにし、実習記録教育のあり方を検討することを目的とした。

Ⅱ 本学における精神保健福祉援助実習

(1) 実習の位置づけと内容

武蔵野大学では平成15年度より精神保健福祉士法に基づくカリキュラムを開講している。精神保健福祉援助実習（以下、実習）は4年次の履修科目として設定し、6月～9月の間に180時間以上の現場配属実習を行っている。配属実習に加えて学内授業での事前・事後学習及び個別指導を設定し、それら全体を通して実習科目が構成される。

実習生は原則2箇所の機関でそれぞれ90時間以上の実習を行うことにしており、1箇所は精神科医療機関（病院）、もう1箇所は行政機関、地域活動支援事業機関、就労支援事業機関のいずれかとしている。実習先は学生の希望や関心テーマそして現住所からの所要時間等を考慮の上、基本的に実習担当教員が選定している。また本学では精神保健福祉士受験資格と社会福祉士受験資格との同時取得の形態はとっていないため、精神保健福祉援助実習が実習生にとって見学実習やボランティア経験等を除いて、初めて現場実習となる。

(2) 「実習記録」の構成と指導内容

本学の実習記録ノートの構成は【表】の通りである。構成内容は精神保健福祉士養成テキスト¹²に準じており、標準的な内容である。また「実習日誌」をはじめ記録用紙のフォーマットも概ね既存のテキストのサンプルを参考にしている。「プロセス・レコード」は宮本の文献¹³に基づいて作成し、「ケース・スタディ」は渡部のアセスメントシート¹⁴に基づいて作成している。

実習記録の指導の概要は以下の通りである。

- ・記録の目的と各記録用紙の活用の仕方及び管理について
- ・記録におけるプライバシー保護の規定について
- ・記録の基本的ルールとマナー（ペン書き、修正液不可、誤字脱字の注意など）
- ・「実習テーマ・実習計画」の設定及び設定における個別指導
- ・「実習日誌」「プロセス・レコード」「ケース・スタディ」の記録作成の実技演習
- ・「報告書」作成過程の添削指導（個別指導）

「実習日誌」【資料】の指導内容について説明を加える。まず表面の各項目に記載する内容を伝え、裏面の記載に関しては「1日の出来事の羅列は避けること」「1日の体験を通して特に印象に残ったこと疑問に感じたことを2, 3点あげ、それらについて考察を深めること」「現場のスーパーバイザー（以下SV）に伝えることを意識すること」等の留意点を伝える¹⁵。その上で、

【表】実習記録の構成

《事前記録》	実習生個人票 精神保健福祉援助実習に向けて一動機と目的— 事前学習記録 実習機関の概況 実習テーマと課題 実習計画・実習前打ち合わせ
《実習中記録》	実習日誌 プロセス・レコード ケース・スタディ
《事後記録》	実習終了レポート（自己評価表） 報告書
《契約・管理記録》	誓約書 出席簿

教員が作成した「実習生の1日（事例）」を読み、学生一人ひとりが事例の実習生と同じ体験をしたと想定して、実習で実際に使用する用紙に記入し日誌作成のシミュレーションを行う。各自が記入した日誌を学生間で共有し、互いに書き方や内容を比較検討しながら必要な修正を加えていく。更に学生が記入した日誌を教員が添削し、個別の指導を行う。

Ⅲ グループインタビュー調査

1. 調査目的と方法

実習記録のあり方や指導方法を検討するにあたり、精神保健福祉援助実習の実習生が、どのようなプロセスを経て記録を書いてきたのかを明らかにするためにグループインタビュー調査を実施した。

調査の対象は、平成21年度に精神保健福祉援助実習を履修した武蔵野大学人間関係学部の4年生のうち、任意で調査協力の得られた6名（女性5名、男性1名）である。グループインタビューの際には、調査目的を説明の上、口頭及び文書にて調査と実習評価とは関係しないこと、プライバシー保護と調査結果の公表に関する約束事を取交わして実施した。今回の調査では、複数の記録書式の中でも、実習中毎日記録する「実習日誌」（以下、日誌）に焦点をおき、以下のインタビューガイドに基づいて自由に意見を交わしていただいた。インタビューの実施日は、実習科目の全課程終了後の2010年2月17日であり、インタビュー時間は2時間程度であった。

〈インタビューガイド〉

- ①日誌を書く上で意図したこと、留意したことは何か。
- ②日誌を書く過程でつまづきや困難を体験したか、またそれはどのようなことか。
- ③日誌を書いて気づいたこと、または変化したことがあったか。
- ④日誌の有用性と問題点についてどのように考えるか。

分析の手順を以下に示す。まずインタビュー参加者の同意を得て面接内容を録音し、録音記録から逐語記録を作成した。次に逐語記録を読み込み、調査目的に照らし合わせて主要な言葉を《重要アイテム》として抽出し、《重要アイテム》から類似のものや関連の強いものをまとめて

《重要カテゴリー》を設定した。更に《重要カテゴリー》間の比較・検討を加えて分析を行い、結果を記述した¹⁶。

2. 調査の結果

グループインタビューの分析結果を以下に述べる。文中の【 】内の言葉は《重要カテゴリー》を示し、「 」内の言葉は《重要アイテム》として抽出したデータ（実習生の発言内容の抜粋）を示す。「 」内文末のアルファベットは調査対象者に対して任意にあてたものである。また（ ）は筆者が補足した。

(1) 記録を書く構え・意図

実習開始時、実習生が日誌を書く上で意図したこと留意したことこの《重要カテゴリー》として【インパクトを書く】【教室学習の再現】【型のはめ込み】【SVとのコミュニケーション】があげられた。

日誌記録で実習生は“何を”“如何に”書こうと意図したのか。インタビュー結果では、実習生は実習当初から【インパクトを書く】ことを意図していた発言が目立ち、「忘れたくないことA」「初めてのことE」「身近なことE」を「臨場感を思い返せるようA」「読み返して分かるようにD」書こうとしていた。また“如何に書くか”では、教室授業で行った日誌の実技演習と「変わらない感じでF」「練習したことに重点を置いて書いたE」と【教室学習の再現】を意図したことがあげられた。

この【教室学習の再現】によって書くことが容易であった実習生がいた一方で、「授業のやり方のようにしなきゃいけないD」と【型のはめ込み】となって作用し、その型に合わない体験を記述することに無理を感じた実習生もいた。この【型のはめ込み】は教室学習の内容によるものだけでなく、「利用者とのかわりかかわりで思ったことを書かなきゃいけないB」「(自分か感じたことよりも)全部整理されたことを書いたC」など実習生が漠然と自らに課して型にはめていたこともあった。いずれにしろ【型のはめ込み】は実習生が体験を記述する上で制約や圧力となり、後述する記録の困難性につながっていった。

また【SVとのコミュニケーション】もあげられた。具体的には「質問したかったことF」「SVが読んだときに(自分が)考えていたことが分かるようにD」書くことを意図していた。

(2) 記録の困難性

実習生が実際に日誌を書く過程で経験した困難性に関する《重要カテゴリー》では、【事からの飽和状態】【選択と構成】【体験した自己と記録する自己】【型にはめることの不自由さ】があげられた。

実習生は1日を通して実に多くのことを見聞きし体験する。それらをその日の日誌に書こうとすると「色々(利用者)話したけど、その時自分が何を思って質問したのか、そこが一番書きたいのになかなか思い出せないE」「出来事のインパクトは凄く残っているけど、その場で自分が(何を)感じたかということが、どうしても抜けてしまうC」と【事からの飽和状態】に陥り、それらの事に対して自分が思ったことや考えたことが想起できずに書くことの困難さを体験

していた。そして「(実習メニューが豊富だと)インパクトの質が全然違って優先順位が(つけられない)。あること(一つ)だけを取り出すと点的になって消化不良E」と様々な体験の中で何かを選択することの難しさも語られた。また「自分の考えを、どう組み合わせ書く順番をどうすればいいんだろうE」と【選択と構成】に難しさを感じたこともあげられた。

【体験した自己と記録する自己】とは、実際に体験した場面で感じ考えたことと、そこから1日を経過して記録を書くときに感じ考えることとの違いについて、両者が自分の中でうまく整理できずに書くこの違和感を示している。具体的には「(書くときは)1日を通しての反省やその後の流れを踏まえて、今こう思っていて、その時にそう思っていたのではないE」「『このように思った』とは書くけど、何気なく後付の理由みたいF」などが語られた。

【型にはめることの不自由さ】は、先述(1)の【型のはめ込み】から生じた困難さを示している。「授業で学んだやり方でやらなきゃいけないと思いながら書いていたが、実習のスタイルと(合わなくて)、どの書き方がいいんだろうってD」と、教室での実技指導の内容が実際の実習内容とそぐわない場合に、実習体験を書くことが困難になる様子が示された。また「利用者とのかわり(について)書かなきゃいけないと思って、それに偏って精神保健福祉士の役割の方に目がいかなくてB」と【型のはめ込み】が実習生自身の視野を限定してしまうことにつながり、結果として「多分深く掘り下げられなかったから、少して終わっちゃう、紙面が埋まらないB」と袋小路に陥って書けなくなる様子も示された。また「疲れもあり、何かを書かなきゃいけないというのがあって書けなかったB」と記録を書くことがプレッシャーとなって更に書くことを困難にしている様子も語られた。

(3) 記録のポイントをつかむ

以上の困難性を体験した実習生は、SVの指導を受けながら記録の試行錯誤を重ね、記録のポイントをつかんでいった。この段階の《重要カテゴリー》として【事がらからテーマ性へ】【全体像から主題を拾い上げる】【部分から全体へ】【SVの関与】があげられた。

先述したように、実習生は体験した多くの出来事の中で何を取り上げたら良いのか分からず困難さを感じていたが、次第に【事がらからテーマ性へ】と展開した様子が示された。「色んな出来事があるが、どこをとっても自分の感じたことにつなげられるというのがちょっとずつあって、インパクトの大きさに縛られない方が逆に良いのかなってE」と出来事の大きさよりもそこから展開する自分の考えに注目するようになり、「(実習を通して)精神保健福祉士の職域や役割や意義を考え始めて、自然にそのことに絡めながら(日誌を書いて)考えていったE」とテーマを通して記録するポイントをつかんでいく様子が示された。また「日誌と自分の(実習前に設定した)実習課題との関連性みたいなものを意識した。やっぱり12日間あると、どこかでそれが抜けちゃうので、日誌も(実習課題に)につなげられるような書き方になったD」と実習前に自分が設定した課題との関連から記録を焦点化していく過程が語られた。

また「(日誌の表面:1日の流れを時間軸で書く)を書いていると、段々裏面(所見欄)のところに書くことが出てきて、良い流れがあるみたいA」「(1日の出来事を)箇条書きにして、ビジュアル的にこれだけあるんだという感じで、その出来事を整理してピックアップして書いていこうかなってE」と【全体像から主題を拾い上げる】ことによって記録の焦点を定めていた様子が

示された。一方「一瞬のインパクトをシンプルな言葉にしてメモしておく。(それらを)流れの中でつなげられるところはつなげて書くD」と一つひとつの体験をピンポイントでマークした上で、それらをつなげて【部分から全体へ】記録を構成していった実習生もいた。

実習生が記録のポイントをつかむために【SVの関与】は大きかった。特に先述した【型にはめることの不自由さ】を経験した実習生は、自分でも記録の書き方に疑問を感じていながら、実際に修正していくのに【SVの関与】が契機となっていた。この点について「書き方にこだわって(記録を)出せる状態までいかななくて、とりあえず書いたがSVに『良く分からない、こう書かれても何て指導して良いのか分からない』と(言われて)、自分のそのように思っていたので、SVと相談して(書き方を変えたら)比較的書けたD」「利用者とのかわりを書かなきゃいけないと思って(深まらなくて)、このままで良いのかって思いがずっとあって、(後半で)SVから(他の視点を示されて)気づいたB」などが語られた。

一方、全ての実習生が記録のポイントをつかめたわけではない。実習の終盤でようやく書き方が分かってきたり、あるいは実習を終えた段階で「もっと自分の素直な気持ちを書いた方が自分の成長につながったのではないかと今は思うC」と、記録を十分に活用できなかった様子もあげられた。このような経験をした実習生は、日誌を書く過程で考えたことや変化について「具体的に思い出せないB」「(日誌を書いて)気づいたこともきっとあっただろうが、具体的に何かっていうのが出てこないC」と共通して語っていた。

(4) 記述の手順

日誌を書く具体的な手順にかんする《重要カテゴリー》は、【思いのままに書く】【構成メモから書く】【下書きを繰り返して書く】【下書きの是非】があげられた。【思いのままに書く】手順で書いた実習生は実習開始から一貫して同じスタイルをとっており、こうした実習生は先述した【記録の困難性】に関するコメントが特になかった点が特徴的であった。その他の実習生はいくつかの手順を試行して自分なりの手順を探していた。また1日分の日誌にかかった時間は、【下書きを繰り返して書く】方法で2時間から4時間におよび時間を要していたが、概ね1時間半程度が多かった。

【下書きの是非】については、様々なコメントがあげられた。【思いのままに書く】実習生はあえて下書きしないことを選んでおり、「自由にくださった表現を使いながら書けたから、下書きしながら書いていたらそれは格好悪いA」「下書きしなかったのは、突然清書してフッと浮かび上がってくることを書いた方が良いと思ってF」と語っていた。

【構成メモから書く】スタイルに定着した実習生も下書きなしで記録することを試しており、「最初に下書きなしで何も考えずにガーッと書いたら、自分の感情をガーッと書いていただけで、もっと深いことを書かなきゃいけない(と思った)E」とまずメモで整理する手順を踏んでいった。一方「(1回下書きしないで書いたら)その方が自分の素直な気持ちが書けたが、やっぱりちゃんと考えて書こうと思って戻した。でも後から読み返すと(下書きしない方が)内容がとてもシンプルでC」といったコメントもあり、いずれの手順が実習生にとって有効であったかは不明だった。また1ヶ所目の実習先で【下書きを繰り返して書く】手順を続けた実習生も「2ヶ所目(の実習)からはそのまま清書で書くようになって時間が半分になった。書くことが分かって

きたし、スピードも出たD」と先述（3）の記録のポイントをつかむことと書く手順の変化とが関連していたことが示された。

（5）記録の機能と有用性

実習を通して実習生が捉えた日誌の機能とその有用性については、多くの《重要アイテム》が抽出され、そこから《重要カテゴリー》として【客観化・明確化】【次のステップにつなげる】【目印をつける】【点と点を結ぶ】【新たな発見への昇華】【SVの視点の取込み】があげられた。

実習生は日誌記録が自分の思いや考えを【客観化・明確化】する機能であったことを認識していた。「書くとき自分だけのものじゃなくなる感じ、自分の言いたいことが目に見えてきて気づくことができるA」「整理して、より客観的に自分を見つめ直す機会にもなるE」と捉え、「書くのと書かないのでは多角的な視点という考え方がかなり違う。思っているだけだと自分の主観しか見えなけれど、書くとき違った見方もできるF」と、自身の考えを明確にしつつ視野を広げていた。また1日の終わりに【客観化・明確化】を行うことで、「次の課題をまとめる場所A」「記録によって文字にすることで次の目標が見えてきたC」と、【次のステップにつなげる】機能としても活用していた。

また「日誌を書くことで（体験したことの）記憶付けになっていたと思うD」と、実習の行程に【目印をつける】ことに日誌を位置づけ、いくつもの【目印をつける】を積重ねることで【点と点を結ぶ】ようにし、実習の全体を通した【新たな発見への昇華】へとつなげていた。具体的には、「これとこれは実はこういう意味でつながっているんじゃないか、と共通項を（結び付け）D」「日誌ってその日の出来事だけれど、積み重ねがあるからこそ今ぶち当たっていることを書いていっている中で、その糧に気づくことがあるA」と、いくつもの出来事の【点と点を結ぶ】ことを見出し、更に「全体を通してその積み重ねがあったので、新たな発見があったE」と【新たな発見への昇華】へのプロセスが語られた。

記録のSVのコメントを通して、SVつまり精神保健福祉士が実践上何を大切にしているのか、何を実習生に伝えようとしているのかを捉えていたことも語られた。例えば「PSW（精神保健福祉士）の考え方が、赤（コメント）の入れ方で見えてくる。SVの考えと自分の考えがどのように違うかが見えたと思うB」「コメント欄でPSWの着眼点分かるF」と、SVのコメントから【SVの視点の取込み】を行いながら実習を進めていた様子が示された。

IV 考察

1. 実習生が記録を通して体得したこと

Kagleは、ソーシャルワークにおける記録の有用性について、実践を再考し、検証し、新しい見通しを得て、サービスを改善する重要な手段となることをあげている。そして考え方を明確にする記録には、様々な情報を分類して「選択」すること、「組み立て」によって理論的に思考すること、観察と推論とを「統合」し且つ全体と分解して「分析」することなど様々な要素によって構成されていることを示している¹⁷。

今回の調査結果をみると、実習生は日誌を書き続ける過程で、次第に多くの情報から自分に

とって重要と思われるテーマや課題に基づいて、場面を「選択」することを学んでいった。そして選択した場面と課題とを結びつけ、また選択した場面と場面との関連性を見出しながら文章を「組み立てる」ことを通して、何かを発見し新たな課題を見出していった。つまり実習生は日誌記録を通して、ソーシャルワークサービスの質を高めるために必要な記録の要素を体得していったと考えられた。

また、調査結果は日誌のように毎日繰り返して記録を書くことの意義を示していた。実習生は、日々の日誌記録を積重ねることで、過去と現在の体験を結びつけ、これまで経験したことの全体像を描いていった。やまだによれば、人は過去をそのままの形で引き出すのではなく、過去は現在と照合されて再編成され生成されていくのであり、書く行為に読み手が参与する共同行為によって経験を組織化し意味づけるという¹⁸。つまり、実習生は日誌を書き続け、そこに読み手であるSVが参与することを通して、ようやく実習で体験したことを意味あるものとして自らの中に位置づけていったと言える。このことは、実習本来の目標である「現場体験を通して知識・技術の理解を深める」¹⁹を具体的に展開する上で不可欠な要素と言えよう。

一方、記録を通して実習生が体得したこととその意義について、実習生自身が自覚し明確にすることが何よりも重要であるが、実際のところそうした教育的アプローチが不十分であった。今回、調査を通して実習生の記録の体験プロセスを言語化することにつながったが、普段の教室授業や個別指導では実習内容や記録内容について振り返ることはできても、記録を書く行為そのものに焦点をあてて学生にフィードバックすることはできていない。実習生が記述する（表現する）ことによって実習体験を意味づけてきたように、記録のプロセスを言語化することによって、はじめて記録の意義を明確にし、ソーシャルワーク実践にその意義をつなげることができる。今後はこの点を教育に組み込んでいく必要性が示唆された。

2. 漠然とした記述から意味のある記録への転換

実習生の多くは実習当初、日誌に「何を」「どのように」書けば良いのか戸惑い、試行錯誤していた。このように漠然とした記述の段階から意味のある記録へと転換したのは、何が要因となって作用し、また書くプロセスにどのような変化があったのだろうか。

井下らは、BereiterとScardamaliaのモデルから看護記録の教育法を論じている。記録の初心者は思いついたこと、知っていることをそのまま表出しており（知識表出モデル）、そこには視点をもった事からの変化や一貫性が読み取れない。一方、記録の熟練者は知識表出過程をベースにしながら、そこから「何を」「いかに」書くかという2つの問題空間を行き来しつつ情報を吟味し、新たな知識へと変形・統合して理論的で一貫した文章を産出している（知識変形モデル）。従って優れた看護記録を書くためには「知識表出モデル」から「知識変形モデル」へと転換する教育が有効であるという²⁰。

今回の調査結果をみると、実習生はインパクトの大きい出来事を次々と書こうとして困難性を感じ、そこから構成メモ等を活用して出来事の関連性を見出し、テーマ性をもった記述へと移行していた。これは、まず下書きやメモのレベルで「知識表出モデル」による記述を行い、そこで表出されたものから何を選択し、どう組み合わせていくかを吟味し、得られた知識を修正・結合して文章を作り出すという2つの段階を経ていると考えられた。教室での記録実技指導では、最

最終的に書いた文章に対するフィードバックはするものの、こうした文章を作り出すプロセスについては触れていない。この点も今後の検討課題である。一方、下書き等をせずに思いつくことを記録した実習生は、先述したように特に記録の困難性は語られなかったが、記録の機能や有用性についてのコメントは豊富であった。この場合、既に頭の中で「知識変形モデル」が作用していたのか、あるいは困難性が表出されなかったのか、その点は今回の調査では不明である。

意味ある記録への転換には、以上のような実習生の試行錯誤のプロセスに加えて、SVの指導やかかわりが大きな要素であったことが調査結果から示された。坪内は実習で考察を深めるためには実習生自身の知識の備え（「学びのレディネス」）も重要な要素であるが、それが十分でない場合もSVへの質問や助言を求めるといった実習生の姿勢（「指導職員への歩み寄り」）によって考察を深めていく可能性があることを示している。また「学びのレディネス」「指導職員への歩み寄り」双方の獲得が困難であった実習生は、「自己との対話」が進まず実習課題が曖昧なまま学びが深まらなかった例もあげている²¹。今回の調査結果でも、意味ある記録へと転換できないまま記録の困難さを抱えて実習の大半を過ごした実習生の存在が改めて浮かび上がってきた。実習前教育はもちろんのこと、実習中に記録のポイントをつかみ考察を深める意図的働きかけの必要性も示唆された。

また体験を概念化し考察を深める記録を書くためには、実習場面へのコミットが前提であることも確認された。実習生の中には、疲労や何か他に気になることがあって、目の前の事象に集中できないこともあった。意識が目の前の事象に向かっていなければ、そこから何かを感じ考えることも抑制してしまい、書きたいことも生まれてこない。このような実習体験を阻害する要因に早期に気づき対応する術を検討することも課題である。

3. 実習内容の多様性と記録の標準化

ソーシャルワーク実践そのものが幅広く多様であるため、現場での実習内容も機関の特徴やサービス内容に応じて実に多様である。調査結果からも、個々の実習生が体験したことは様々であり、実習生の記録に対する準備状況も一定でないことが確認された。また、教室授業で記録の書き方について一定の枠組みを指導したことが、実習生によっては現場の多様性に対応できない困難さを引き起こしたことも示された。このことは実習における記録の位置づけをより複雑にしており、それゆえ実習記録の重要性が言われながらも、記録の枠組みや方法を明示することを避けているとも言える。

Kagleはソーシャルワーク記録の多様性と一般化することの困難さを認めているが、それでも記録の特質の一般化が必要であり一定のガイドラインを示している²²。更にKagleは、教室での記録に関する準備が不十分であれば、学生は現場で学ぶ特殊な事象を理解し見極める枠組みを持ち得ないことを指摘し、現場の多様性・特殊性から実践と文書の結びつきを学ぶために、教室で一般的な記録の概念を学ぶことが不可欠だと強調する²³。

こうした事態を改善するための一つとして、記録様式の標準化があげられる。記録を書くことの困難さは、記録教育の問題と記録の書式の問題とがあり、その両者が改善されることで有効な記録となり得ることが指摘されている²⁴。本学の実習日誌は実習テキストを参考にしたものであるが、その書式は非常に漠然としている。実習記録の書式を変更したことで、実習場面で利用者

の反応に意識が集中し、実習の振り返りが深まる傾向が見受けられたという報告もあり²⁵、日誌の書式を工夫し「何を書くか」一定の標準化を加えることも検討課題である。ただしここで重要なのは標準化の程度である。高度に標準化された書式は必要な情報への接近が容易となりそれらが記録される可能性が増すが、実践が類型化される傾向を生む。一方、標準化されていない書式は必要な情報が漏れるリスクもあるが、実践を個別化し援助者自身の考えを記録に反映するという²⁶。現場体験を通して専門職としての視点を養い、既存の知識を自己のうちに構造化し、そして専門職として自分のありようを振り返ることが、実習の重要な要素であれば、「何を」「どのように書くか」という思考のプロセスを辿ることは外せないものである。

要するに、実習の目的を損なうことのない記録の標準化とはどの程度のものなのか、という問いに取り組むことが現時点での課題と言える。また記録の方法と様式の標準化は、実習現場およびSVと共有することが不可欠である。記録について一定の共通認識が伴わなければスーパービジョン機能に混乱をきたし、実践現場と教育現場とが連続性をもって実習教育を行うことが難しくなるだろう。

V おわりに

精神保健福祉援助実習を行った実習生に対してグループインタビューを実施し、実習生が記録を書くプロセスを明らかにすることで、実習記録の指導内容及び教育方法を考察した。実習生は記録の困難さを体験しながら、実習における学びに記録を活用する技能を身につけていく様子が示された。一方こうしたプロセスは、実習生自身の努力と実習現場およびSVに依存する傾向にあり、教育機関における記録指導については、漠然と認識していた問題が具体的に見えてきたというところである。また今回の調査は単年度の限られた実習生を対象としたものであり、複数の記録の中でも日誌に関する項目のみを分析したものである。今後は「プロセス・レコード」「ケース・スタディ」「報告書」の作成過程も加えて総合的に検証するとともに、調査を重ねながら記録教育の方法について検討したいと考える。

最後に、本調査に快く協力してくれた実習生の皆さん、そしてお忙しいところ熱心に実習指導にあたって下さったスーパーバイザーをはじめ職員の皆様と利用者の皆様に心から感謝申し上げます。

【註・文献】

- 1 Kagle J.D. (1991) *Social Work Record, Second Edition* (=2006, 久保紘章・佐藤豊道監訳『ソーシャルワーク記録』相川書房, 101
- 2 岩間文雄編著 (2006)『ソーシャルワーク記録の研究と実践』相川書房, 101-106
- 3 平成10年各都道府県知事あて厚生省大臣官房障害保健福祉部長通知「精神保健福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について」
- 4 2010年9月現在検討されている精神保健福祉士養成教育のあり方における科目の見直し案では、実習指導の項目で『「実習記録ノート」への記録内容及び記録方法に関する理解』の記載がある。

- 5 昭和63年都道府県知事あて厚生省社会局長通知（平成14年最終改定）
- 6 樋澤吉彦（2002）『『実習記録』に関する基礎的考察—『社会福祉援助技術現場実習』関係文献の検討を通して—』『新潟青陵大学紀要』2, 27-38
- 7 遠藤克子（2002）「社会福祉援助技術現場実習を効果的に展開するための実習記録の活用について」『社会福祉研究室報』12, 48-63
- 8 古川隆司（2004）「社会福祉援助技術現場実習における記録とスーパービジョン（1）—観察する態度を中心とした教育実践の試み—」『皇学館大学社会福祉論集』7, 37-47
- 9 宮崎まさえ（2005）「精神保健福祉援助実習における実習記録ノートの集計・分析結果—実習教育に関する一考察—」『長野大学紀要』26（4）, 71-80
- 10 坪内千明（2010）「相談機関実習の学びの構造—オプション実習における学生の実習日誌に基づく質的分析—」『ソーシャルワーク学会誌』19, 57-69
- 11 このことは実習記録のみならず、ソーシャルワーク実践記録自体が抱える課題であることが指摘されている。根本博司（2005）「実践記録の現状と課題」『ソーシャルワーク研究』31（3）, 4-13
- 12 日本精神保健福祉士養成校協会編（2009）『精神保健福祉援助実習』中央法規, 228-235
- 13 宮本真巳編著（2003）『援助技法としてのプロセスレコード』精神看護出版
- 14 渡部律子（1999）『高齢者援助における相談面接の理論と実際』医歯薬出版, 71-108, 274-275
- 15 これらの指導内容について、日本精神保健福祉士養成校協会編（2009）前掲書, 228-235を参考している。
- 16 安梅勅江（2001）『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法』医歯薬出版
- 17 Kagle J.D.（1991）前掲書, 175-177
- 18 やまだようこ編著（2000）『人生を物語る—生成のライフストーリー—』ミネルヴァ書房, 1-11
- 19 平成10年各都道府県知事あて厚生省大臣官房障害保健福祉部長通知「精神保健福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について」
- 20 井下千以子他（2004）『思考を育てる看護記録教育—グループ・インタビューの分析をもとに—』日本看護協会出版会, 162-166
- 21 坪内千明（2010）前掲文, 57-69
- 22 Kagle J.D.（1991）前掲書, 23-67
- 23 Kagle J.D.（1991）前掲書, 101-105
- 24 井下千以子他（2004）前掲書, 153
- 25 岩井恵子（2009）「思考力を育てる実習記録への試み」『大阪体育大学短期大学部紀要』10, 17-32
- 26 Kagle J.D.（1991）前掲書, 107

【資料】表

8. 実習日誌

病院・施設名	実習生氏名
実習 日 日	月 日 ()
本日の目標 (何を意図して実習に臨むのかを記述する)	
時 刻	スケジュール (参加した活動内容)
	実習生の動き (自分は何をしていたのか)

【資料】裏

1日の実習を通して特に印象に残った出来事について、自身の所感・意見・考察を述べる

実習指導者コメント (実習生の実習状況、記録日誌からコメントをお願いします。)

実習指導者名

印

武蔵野大学